一 [二〇一六年度本試験 第1問] 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 ホーフスタッターはこう書いている。

ex1 反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたもの**ではない。まったく逆である**。教育ある者にとって、もっとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、チンプな思想や認知されない思想にとり憑かれている。反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知識人もほとんどいない。

（リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、強調は引用者）

2 この指摘は私たちが日本における反知性主義について考察する場合でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、単なるタイダや無知**ではなく**、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

3 この言葉はロラン・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。

ex2 バルトによれば、無知とは知識の欠如**ではなく**、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う。実感として、よくわかる。「自分はそれについてはよく知らない」と涼しく認める人は「自説に固執する」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「得心がいったか」「腑に落ちたか」「気持ちが片づいたか」どうかを自分の内側をみつめて判断する。

ア そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は「知性的な人」だとみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算している**のではなく**、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えているからである。知性とはそういう知の自己刷新のことを言うのだろうと私は思っている。個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。

4 「反知性主義」という言葉からはその**逆のもの**を想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、手持ちの合切袋から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる。**けれども、**それをいくら聴かされても、私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない。というのは、イ この人はあらゆることについて正解をすでに知っているからである。正解をすでに知っている以上、彼らはことの理非の判断を私に委ねる気がない。「あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない」というのが反知性主義者の基本的なマナーである。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは「理非の判断はすでに済んでいる。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と私たちに告げる。そして、そのような言葉は確実に〈r1〉「呪い」として機能し始める。というのは、そういうことを耳元でうるさく言われているうちに、こちらの生きる力がしだいに衰弱してくるからである。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しよ

うと、それは理非の判定に関与しない」ということは、「あなたには生きている理由がない」[ウ]と言われているに等しいからである。

5 私は私をそのような気分にさせる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「知性的」であると思っているかも知れない。たぶん、思っているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷりに語るし、反論されても少しも動じない。**でも**、やはり私は彼を「知性的」**とは呼ばない**。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思っているからである。**だが**、私はそれ**とは違う**考え方をする。

6 知性というのは個人において**ではなく**、集団として発動するものだと私は思っている。知性は「集合的叡智[エイチ]」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなもの**を私は知性と呼ばない**。

7 わかりにくい話になるので、すこしていねいに説明したい。

8 私は、知性というのは個人に属するもの**というより**、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。[エ]その万動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。

ex3

9 ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思い出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

10 知性は個人の属性**ではなく**、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量**できない**。**そうではなくて**、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

ex4

11 個人的な知的能力はずいぶん高いよう**だが**、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるというようなことは現実にはしばしば起こる。きわめてヒンパンに起こっている。その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまう[オ]という場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない。

（内田樹[たつる]「反知性主義者たちの肖像」）

〔注〕

○リチャード・ホーフスタッター　――Richard Hofstadter（一九一六～一九七〇）。アメリカの歴史学者・思想家。

○ロラン・バルト　――Roland Barthes（一九一五～一九八〇）。フランスの哲学者・批評家。

問1　「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」（傍線部ア）とはどういう人のことか、説明せよ。

問2　「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問3　「『あなたには生きている理由がない』と言われているに等しい」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

問4　「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」（傍線部エ）とはどういう力のことか、説明せよ。

問5　「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」（傍線部オ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

問6　傍線a、b、cのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　チンプ　b　タイダ　c　ヒンパン

解答（青本　大学年度別）

1　×××××
他者の言葉を自らの身体的な実感でその当否について判断し、知的枠組みを柔軟に刷新して未知なるものを捉えようとする人。

2　×××××××××
反知性主義者は自己の信ずる真理性を絶対的なものと思い込み、他者の判断を考量する余地は全く持たないということ。

3　×××
自己を絶対化して他者の判断を無化する反知性主義者の言動は、人々の生きる力を否定して衰弱させる機能を持つということ。

4　×××××××××××
相互に影響を及ぼすことで人々に新たな気づきと発想をもたらし、集団全体の知的活動を刺激して合意形成へと促す知性の力。

5　×××××××××××××××××××××
現在の日本を考えるとき、自己の独善的な主張を周囲に強いる人間が知性的であった例のないことから、私たちは反知性主義者の偏った情熱に屈することなく、知性を重視して他者とともに自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要があるということ。

陳腐　怠惰　頻繁